

『世界の中心で、愛をさけぶ』論

大沢 正善

片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』（小学館）は二〇〇一年四月に刊行されたが、〇六年二月の段階で三〇〇万部以上を売り上げたという。女優柴崎コウが「泣きながら一気に読みました。」と語った言葉（「ダ・ヴィンチ」〇二・四）が帯に付され、〇三年になつてブレイクしたようだ。帯には一九歳と一七歳と二一歳の女性の感動のコメントも付されている。その後、柴崎が出演して映画化され、テレビドラマ化もされている。インターネット上にはそれらの公式ホームページやファンサイトも開設されている。読書離れが進んでいるとされる中での三〇〇万部以上であり、この純愛小説が若い女性の涙を絞った秘密は、やはり知りたい。メディアにおける展開についても考察したい。

一、純愛と病氣

松本朔太郎（サク）と廣瀬亜紀（アキ）は中学二年で同じクラスになり、互いに好意を抱く。高校では恋愛に発展するが、アキは高校二年の夏に入院し、皆がオーストラリアに修学旅行に行っている間に再生不良性貧血と診断され、闘病の後十二月に亡くなる。じつは白血病だった。サクは悲嘆に沈み、翌春にオーストラリアで散骨しようとして果たせず、十数年後ようやくそれを果たす。

純愛小説の一般的な条件は、まず恋人たちが互いに純粋に愛し合っている、その愛を純粋のまま保つために、愛の日々を非日常的な浄化された空間の中で描くか、限られた時間の中で短くも美しく全うするように描くこと、であるだろう。多くの純愛小説が、恋人たち以外の登場人物を少なくし、宿命的な別離の枠組において描かれるのはそのためである。この作品でもサクとアキは愛し合い、二人の日々の舞台は、二人だけの夜を過ごした夢島と、アキの個室の病室と、

アキの死後のオーストラリアと、一人住まいの祖父のマンションで多くを占められ、自宅や教室での場面は少ない。いずれも日常生活から隔離された空間である。夢島へは同級生の大木にそそのかされ、肉体関係を結ぶ下心で出かけたのであったが、不純な下心を描くことでかえって、普通の高校生の純愛を印象づけようとしたらしい。同級生は二人を夢島まで運んだ大木ぐらしか登場しない。アキの両親は登場するが、サクの両親はほとんど登場しない。一般的な条件はすでに満たされている。

また、別離の枠組が不治の病気による、決して再会することのない永訣であることも重要である。単なる別離であれば再会も可能で、再会までの苦闘や再会後の葛藤などが描かれれば、生々しい不純が混じるからである。当然のこと、舞台は日常社会から隔離された病室に限定され、二人の愛は死までの時間を惜しんで昂揚し純粋さを増す。さらに、その病名も重要である。S・ソングは「仰々しくも隠喩に飾りたてられた病気が二つある——結核と癌と。」「隠喩的な意味では、肺の病気とは魂の病気である。あたり構わず攻撃をしかけてくる癌は、肉体の病気だ。」と述べ、多くの文学に援用された病気のイメージを分析（『隠喩としての病』八二・四、みずす書房）した。

たしかに、二〇世紀には肺結核患者を主人公にしたサナトリウム

小説が現われ、T・マン「魔の山」(二四)を代表として、日本でも堀辰雄「風立ちぬ」(三八)などが、孤高の思索や純愛を描いた。結核は肺にだけ巣食うのではなく、サナトリウムの立地は海辺と高原に大別されるが、描かれればいつも肺結核でありサナトリウムは高原にある。「風立ちぬ」で小説家でもある主人公は、婚約者の肺結核の療養に付き添い、彼女が死ぬまでの間、「こういう山のサナトリウムの生活などは、普通の人々がもう行き止まりだと信じているところから始まっているような、特殊な人間性をおのずから帯びてくるものだ。」「私たちはそれらの似たような日々を繰り返しているうちに、いつか時間というものからも抜け出してしまっていたような気さえするくらいだ。」という非日常的な時空間の中で、「真の婚約の主題——二人の人間がそのあまりにも短い一生の間をどれだけお互いに幸福にさせあえるか？ 抗いがたい運命の前にしづかに頭を項低れたまま、互いに心と心と、身と身とを温め合いながら、並んで立っている若い男女の姿」を描き尽くそうとする。

この作品でも、アキの「白血病」は「白血球の腫瘍性増生を来す疾患。急性・慢性、また骨髄性・単球性・リンパ性などの別がある。貧血・肝腫大・脾腫を伴い、発熱、出血傾向、感染力低下等を来」(『広辞苑』)すとされ、「血液の癌」と呼ばれる。化学療法や骨髄移植が進歩したが、死亡率は四割とまだ高い。「再生不良性貧血」は

「骨髓における赤血球、白血球、血小板の生成がいずれも低下する」(『広辞苑』)とされ、造血不全の点で白血病と似ていて悪性度が低いため、本当の病名を隠すためにアキには告げられたのである。結核が不治の病ではなくなった現代において、それを代行する病気として選ばれたのであろう。例えばAIDSは癌に似て、不治度は高いが選ばれないだろう。

サクは中学二年のクリスマスのラジオ番組に、アキを「白血病」に仕立てて「今も入院して治療をつづけて」いるので彼女に曲を届けたいとリクエストした。後に「あんなことを書いたから。ぼくがアキの不幸を呼び寄せてしまったんだ」などと悔やむが、アキの不治がすでに予告されている。夢島で過ごした夜に、「百や二百ではきかないくらいの蛍」がアキの体にまとわりつき、「まるで蛍の方が彼女を選んだみたいだった。何かの合図を送っているかのように」と感じたことも、美しい場面というより、死者の霊を連想させて不気味である。中学三年の時にアキのクラス担任が癌で亡くなり、アキが弔辞を述べたことも伏線の一部である。

さらに、病院から抜け出してオーストラリアへ行くこととする飛行場のロビーで倒れたアキの「鼻と口が血で真赤だった」ことも、劇的な演出であつたらう。若年に多い急性の白血病では血小板にも異常を来して出血しやすく、入院中に「身体のおちこちに、小さな紫

色の出血斑が出ていた。」という予兆があり、飛行場に向かうタクシーの中で「鼻血」が出始め、タクシーを降りた時には「ティッシュは、すでに血を吸ってぶよぶよに」なり、アキは倒れるのである。清潔なものを真赤に汚す映像を用いて、死が次第にしかも確実に迫る様子を劇的に描いている。

肺結核の咯血の場面を探してみると、徳富蘆花「不如帰」(一九〇〇)で浪子は、「俄かに胸先苦しく頭ふらく」として、紅の靄眼前に渦まき、我知らず呀と叫びて、肺を絞りし鮮血の紅なるを吐ける其時！」と初めて咯血し、二年半後に「病は日に募りぬ。数度の咯血、」を経て、家の離れで「生命を縮むる咳嗽と共に、肺を絞つて一盞の紅血を吐きつ。憎々として臥床の上に倒れ」て死を迎える。モデルもある陸軍中将子爵の娘の愛と死を劇的に演出している。その後、「風立ちぬ」では、看護婦が主人公に「すこし血痰を出してよ」と耳打ちをした二ヶ月後に婚約者は死ぬ。横光利一「春は馬車に乗って」(二六)では妻の「咳の大きな発作」は描かれるが、咯血は描かれず、妻の死までを描いた続編「花園の思想」(二七)でも咯血は描かれない。芹沢光治良「巴里に死す」(四三)でも、福永武彦「草の花」(五四)でも咯血の描写は見当たらない。サナトリウム小説といえそうな作品では、かえって咯血の描写は控えられている。赤い鮮血を手やハンカチで受ける咯血の場面は、映画やテ

テレビなどの映像媒体で習慣化されたものではなかったらうか。この作品でも、そうした映像的な習慣を無意識に利用したのである。

細部にも多くの伏線を用意している。二人が中学の文化祭で「ロミオとジュリエット」を演じたり、高校一年の授業で「竹取物語」を講読したり、その夏の読書感想文のために「出発は遂に訪れず」を読んだり、「銀河鉄道の夜」の名前が不意に登場したり、悲しい別離の物語を数多く援用して、純愛を喚起している。「ロミオとジュリエット」では仇敵の家柄に生まれた二人の宿命的な愛と死を描いている。「出発は遂に訪れず」で主人公は特攻隊の出撃命令が出て恋人に別れを告げるが、待機している間に終戦を迎える。アキをオーストラリアに運ぶ出発が訪れないことを予告する。その飛行場までの夜の道行きは、「銀河鉄道の夜」で夜行列車の中で振り返ると親友の二人に別離が訪れる設定と似ている。そして、「竹取物語」の講読に耳を傾けながら、サクは「もし一人一人に与えられた幸せの量が決まっているのだとすれば、この瞬間に、一生分の幸福を蕩尽しようとしているのかもしれない。いつか彼女は月の使者によって連れられてしまう。」という確信に捉われていた。

二、世界の中心

作品の内容を知る手がかりとして、表題は重要である。「世界の中心で、愛をさけぶ」という表題は、「世界」も「中心」も「愛」も具象性を排除した抽象語であり、「さけぶ」も柔らかなひらがなで表記され、読者の感情移入を誘いやすい。それならば「世界の中心」とは何処を指しているのだろうか。「ドラマ・小説・映画ファンサイト」(<http://www.alived.com/ai/novel.html>)では「世界の中心」ってどこ? という質問に次のように答えている。

3 通りの考え方ができると思います。

1 サクとアキがいた場所（大切に想い合った空間）が、常に世界の中心だった（サクにとっての世界の中心には常にアキがいた）。

2 オーストラリア、アボリジニの聖地。アキの遺骨を散骨した場所が、世界の中心。

3 二人きりの夢島。幸せの絶頂であり、「あそこにはすべてがあった」という、アキを失った直後の回想が根拠。

なお小学館のサイトには『一人の人を深く想うとき、ぼくたちは思わず知らず、世界の中心を生きている』という片山氏のコメントがあるので、「1」が有力なんじゃないかな。

考えてみれば、「愛をさけぶ」とは愛の歓喜を叫ぶのだろうか、愛の悲嘆を叫ぶのだろうか。右の「3」ならば愛の歓喜を叫ぶのだ

ろう。夢島での場面は二人になってから本文(二〇六頁)で二〇頁も続く。しかし、高校生の恋人同士らしい会話が続き、「抱き合ったまま目を閉じ」、「夜中に目が覚め」、アキにまわりつく螢を「息をひそめて」見ているばかりで、愛の歓喜を叫びはしなかった。むしろその「すべてがあった」ことを喪失した後、愛の悲嘆が叫ばれることになるのだろう。その機会は何度かあった。最も劇的な場面は、飛行場のロビーでアキが倒れる場面であろう。

「アキ」／駆け寄ったときには、すでに人が集まりはじめていた。鼻と口が血で真赤だった。呼びかけても返事がない。(中略)／「助けてください」取り囲んでいる人たちに向かって言った。「お願いです、助けてください」

サキは必死で「助けてください」と「言う」が、叫んではいけない。また、「助け」を求めているのであって「愛」を叫んではいけない。少し先では、

ぼくが語りかけていたのは、アキでもなければ、まわりの人々でもなかった。もっととおおきなものに向かって、ぼくは自分だけ聞こえる声で、繰り返し訴えつづけていた。アキを助けてください、ぼくたちをここから救い出してください……

と、サキの「訴え」は「もっととおおきなものに向かって」抽象度を増すが、まだ生々しく「助け」と「救い」を求めている。

次に「世界の中心」に相応しいかもしれない場面は、アキの死の現実を受容し克服するために散骨しようとした、右の「2」である。アキは皆と修学旅行に行けなかったことを残念に思ったのであろう。夏休み後に「アボリジニの世界観や伝統的な生き方に興味を」示し、「彼らは地上のすべてのものは、理由があって存在すると信じているの」と語り、両親に散骨を「亡くなる前にうわ言のように」依頼していた。両親とサクは「アボリジニの聖地」を訪れ、現地のガイドからアボリジニは「最初は普通に土に埋葬」し、二、三ヵ月後に「遺体を掘り出し、骨を拾い集め、死者が生きていたときとおなじように」並べ、「くり抜いた丸太の中に収める」という習俗について説明を受けて、散骨する。「一回目の埋葬は肉体のためで、二回目目は骨のためと考えられ」ているのだという。

白い灰のようなものが、両親の手から放たれた。それは風に乗って飛び散り、赤い砂漠に散らばった。アキの母親は泣いていた。父親が彼女の肩を抱き、二人はもと来た道を、ゆっくり引き返しはじめた。ぼくは動けなかった。赤い砂の大地に飛んでいったものを、まるで自分のかけらのように感じた。もう二度と拾い集めることのできない、ぼく自身のように。

「三人で分担して撒こう」と言われ、「ぼくの掌に、ひんやりとした白っぽい粉があった」が、サクが散骨したかは明確ではなく、

何か叫んだとも描かれていない。サクは「動けな」いまま、アキの死の悲嘆に決着をつけられないでいる。物語の構成において「中心」とは、一連の出来事（ストーリー）を意味ある因果系列（プロット）として決着させる場面のことであるだろうし、そこで付与される意味こそが主題であるのだろう。この場面も「世界の中心」ではないが、少なくとも骨灰を撒くということがその指標であるらしい。

帰国し、三月に再び夢島を訪れ、船を出してくれた大木に「その骨を、ぼくはこの手で、赤い砂漠に撒いてきた。」と語るが、まもなく「ジャンパーのポケットから、透明なガラスの小瓶を取り出した。なかには白っぽい砂のようなものが入って」いて、「彼女を焼いた灰だよ」と語る。その小瓶をポケットにしまい、「先ほど海岸で拾ったガラス片」を「海に向かって思い切り放っ」て帰ることにした。オーストラリアで骨灰を撒いてきたのかどうか矛盾を含み、ここでもガラス瓶の代りにガラス片を投げて、悲嘆に決着をつけられないでいる。

ここで、この作品の通時的な構成を考えてみたい。冒頭の「第一章 1」はアキの両親とサクがオーストラリアに出発する場面から始まり、「2」で中学二年で同じクラスになる回想へと戻り、「第三章 7」でアキは死を迎え、「第四章 3」でオーストラリアで散骨しようとする場面が描かれる。その「4」で「夢島」を再訪し、

「第五章」は「この十年ほどのあいだに」大きく変化した街に久しぶりに戻る、六頁の場面が描かれて、作品は閉じられる。

この構成から判断すれば、物語の大きな枠組は、オーストラリアで散骨する場面を現在として、サクがアキとの恋愛を回想するというものである。その枠組を額縁として物語は完結し、主題もその中で意味づけられているはずである。そうだとすれば、決着をつけられないほどの深い悲嘆こそがこの作品の主題なのだろうか。その深さこそ、実際に叫ばなくても「愛をさけぶ」という表題に相応しいのだろうか。「第五章」でサクは「この世界には、はじまりと終わりがある。その両端にアキがいる。それだけで十分な気がした。」と感じるが、「その両端（の内側）にアキがいる。」と補えば、「世界の中心」とはアキがいて愛を育てた日々を指すとも考えられ得る。先の「1」に当たるだろう。そして、ここでサクは「上着のポケットから、ガラスの小瓶を取り出し」、ようやく遺灰を撒く。末尾は次のようである。

ゆっくり瓶の蓋をまわした。そこから先は、もう考えなかった。瓶の口を空に向け、腕をいっぱい伸ばして大きな弧を描いた。白っぽい灰が、沫雪のように夕暮れの空を舞った。また風が吹いた。桜の花びらが散り、その花びらに紛れて、アキの灰は見えなくなった。

あれほどためらわれた散骨がいと自然に果たされている。この場面は深い悲嘆がすでに癒されていた余韻の場面なのだろうか。いや、単純にそうではないだろう。本書の帯には「十数年前。高校時代。恋人の死。／「喪失感」から始まる魂の彷徨の物語。」とも記されていたが、オーストラリアで散骨しようとした大きな枠組から逸脱して描かれた場面であり、新たな人物も登場している。サクは「彼女」とだけ記される女性を連れて祖父の墓参をし、中学校の校庭を訪れ、遺灰を撒いたのである。そこに、どのような「魂の彷徨」の決着を読み取ることができるだろうか。

サクはその女性にアキのことを話してはいないだろう。城山への登山道で、アキが好きだったアジサイを見つけてサクは立ち止まるが、「彼女は一瞥して、「アジサイがそんなに珍しいの?」と言いたげに振り向いた。」と記され、アキの墓参をした形跡はない。一方、次節で触れるような祖父の恋愛は話したらしく、「お祖父さんにもお会いしてみたかったな」「作り話じゃないかって、半分くらいは疑ってたの」「実際にお墓を見て、(中略)やっぱり信じるしかないわね」と語る。サクは祖父の葬式に彼女を連れてきたのではなく、婚約を報告するために、魂の彷徨に決着をつけるために、祖父の墓参をしたのであろう。

サクは祖父に触れて「死んで長い時間が経つと、もともとそんな

人はこの世にいなかったような気がしてくるんだ」と語ったが、もちろんアキのことを暗示している。二度目の夢島行の時、「たとえ証明できなくても、彼女がいると、僕が感じていることは事実なんだ」と語る一方で、すでに「アキの思い出もまた風化しつつあるのだろうか。」と感じていた。それなのに、中学校で「彼女は華やいだ声を上げて遊具の方へ小走りに駆けて」いくと、「不意にアキの声が甦」る。その声を聞きながら、「アキという一人の人間の中に包み込まれていた美しいもの」は「明るく光る星の下を、いままも走りつづけているのだろうか。」「この世界の基準では測れない方位に沿って。」と、宮沢賢治の「青森挽歌」を援用しつつ考え、次のような思いに達する。

あるいはいつか、ここへ戻ってくるころがあるのだろうか。ずっと以前になくしたものが、ある朝ふと、もと置いた場所に見つかることがある。きれいな、昔あったままの姿で。なくしたときよりも、かえって新しく見えたりする。まるで誰か知らない人が、大切にしまってくれていたかのように。そんなふうにして、彼女の心はまたここへ戻ってくるのだろうか。

サクはおそらく、アキを忘れず、逆にしがみつかず、その狭間を彷徨してきたが、思い出を風化させたことを自責しなくても、アキの心は、「ふと」した時に「なくしたときよりもかえって新しく見

えたりする」ように訪れてくれるのだ。サクはそれに気づいてようやく、アキの心を迎え入れてアキの遺灰を撒き、アキへの個別の愛から解放されて普遍の愛へ進み出たのかもしれない。その緩やかな思想のようなものを携えて、サクは「彼女」との新しい愛を育てることになるのだろう。

物語の枠組もここまで拡張されているのだろう。そのとき、このサクとアキの純愛物語はサクの成長物語に様相を変え、「世界の中心」も新しい恋人をも包含する地点まで移動、あるいは深化することになる。それは、「風立ちぬ」の末尾で主人公が、

帰っていらっしやるな。そうしてもしお前に我慢ができたなら、死者たちの間に死んでお出。死者にもたんと仕事はある。

けれども私に助力はしておくれ、お前の気を散らさない程度で、しばしば遠くのものが私に助力をしてくれるように——私の裡で。

というリルケの「レクイエム」を口ずさみ、生死を超越して他の存在に生かされることを甘受し、世界と親しくなる姿勢を学んだ解決に届かないかもしれないが、決して付け足しの余韻の場面ではない。

たしかに、サクが散骨をためらったばかりでなく、それを記すテクストもいつ撒いたかに矛盾をきたしている。物語の枠組も「アボリジニの聖地」を訪れた現在の場面で囲い込むはずだったのに、十

数年ためらったあげく、現在という位置がズレ、額縁が歪んでしまったかもしれない。通時的構成に破綻が見えることは否定できないであろう。それでも、この作品は純愛や成長の物語を支える興味深い共時的構造を備えている。

三、祖父の物語

この作品の主人公はもちろんサクとアキであり、二人の純愛が主たる物語を構成し、成長物語にまで届こうとしている。しかし、それを支えるもう一つの物語が構造化されている。サクとその祖父の交流とそこで語られる祖父の恋愛がそれである。

サクは高校二年の時、祖父からかつての恋人の遺骨を盗む手伝いを頼まれる。中学校に入った頃から祖父から「その人」のことは聞いていた。二人は「一七か一八のころ」に出会い、彼女は肺結核にかかり、出征を前にあの世で一緒になろうと誓った。戦後に必死で働き金を貯めているうちに、特效薬ができて彼女は治り、小学校教師と結婚させられてしまう。祖父も結婚したが、「五十年」間、互いに忘れられないまま過ぎて、その彼女が最近死んだらしい。サクと祖父は彼女の婚家の墓から遺骨を「慎ましい量」だけ盗むと、祖父はさらに、自分が死んだら「この人の骨とわしの骨を同じくらい

混ぜて、朔の好きなところに撒くのだ」と頼むのだった。

祖父と彼女が一七歳頃に出会い愛し合ったことは、そのままサクとアキに当てはまる。結果的に二人が結ばれなかったことも当てはまる。彼女とアキが不治に近い病であったことや、祖父とアキが散骨を望んでいることも似ている。彼女は董を好み、アキはアジサイを好んだ。しかし、「五十年」を隔てて戦前と戦後の時代状況は大きく違い、祖父が「やくざな商売に手を染めていた」こともあって彼女の家の理解が得られなかったり、彼女の病気が治ったおかげでもあるが、それぞれ結婚して「五十年」をひそかに愛し続けたという違いがある。祖父と彼女の愛とアキとサクの愛は、当然のこと、似ているようで似ていなくて、親近的な他者の関係にある。

そして、サクとアキは祖父と彼女の愛から多くを学んでいる。サクは盗骨の依頼の段階からアキに報告し、「こういうのって、やっぱり不倫になるのかな」「純愛にきまってるじゃない」と語り合い、「あの世」を信じるかどうかの議論にも発展する。実行した翌日にはその「白っぽい骨の破片」を見せ、「こうして二人で見ると、なんだか気持ちが悪くつく」「わたしも」と語り合い、別れ際に初めてのカスをやる。動物園でデートをしたときにも、その骨の話から、長く愛することの困難について語り合い、入院してからも祖父のことは話題になった。アキがアポリジニの世界観に興味を示した

のも、修学旅行に行けなかったからだけでなく、祖父と彼女の愛から死生観を学び始めていたせいもあったろう。

このように、祖父と彼女の愛の物語がアキとサクの愛の物語を育て誘導している点で、二つの恋愛物語が、対照的に並行する複層的であるより、一が他の糧になる重層的な構造になっている。その重層性において、この二つの恋愛は純愛というものの時代や状況を弁証的に止揚した姿を主題化することになり、豊かな鑑賞を可能にするはずである。

ただ、二人の愛と死の学習が遺骨をめぐる展開されることは、やはり異常である。散骨自体は今日、自然回帰への願望などから希望者が増え、社会的にも認知されている。しかし、恋人の遺骨への愛着が、盗骨にまで発展したり、「わたしが死んだら、朔ちゃんはわたしの骨を食べるの?」「食べたいね」といった会話まで引き寄せてしまうと、広義のカニバリズムに接近するだろう。カニバリズムとは、死せる親族や殺した敵の人肉を食べ、対象の持っていた霊力を自己の中に取り込もうとする、呪術的な習俗のことである。

それでも、その呪術性こそが二つの純愛を強く結びつけるものとして機能していると考えてよいだろう。ライダーズ・ジム『謎解き『世界の中心で、愛をさけぶ』』(夏目書房、〇四・四)では「一九八八年から翌年にかけて起こった四人の少女誘拐殺害の犯人」が

「犯行と並行して、死んだ祖父の骨を墓から盗んで食べて」いたことを紹介しつつ、「骨そのものに対するフェティシユな執着というよりも骨の扱いを通して死者との関係をどう折り合いをつけていくかということが問題にされています。」と述べている。サクとアキは祖父の恋人の遺骨の入った小箱を見て「ちょっとたじろぐような素振りを見せ」て畏れたり、散骨を依頼されたことを聞いて「いいお話じゃない」と憧れたり、「彼女はポケットの上から小箱に手を触れ、あらためて唇を強く押しつけてきた」りしながら、魅せられたように愛と死の問題を考察して行く。

その呪術性は作品の後半で弱められる。サクと祖父は「骨の破片」を盗んだのであったが、サクが撒いたのは「彼女を焼いた灰」「白っぽい粉」「白っぽい灰」だった。注意深く見れば一貫してはいないが、およそ「骨」から「灰」に移行している。「骨」は物質性を強く印象づけるが、「灰」はオーストラリアでは「風に乗って飛び散り」、作品末尾では「桜の花びらが散り、その花びらに紛れて、アキの灰はすぐに見えなく」なる。日本の和歌的伝統において、桜花と雪が紛れてしまうように、「骨」の呪術的物質性は和歌的抒情の中に解消されてしまう。純愛物語にその呪術的物質性は生々しすぎたのであろう。

さて、サクと祖父の交流の意義はそれにとどまらない。アキの死

後、正月を茫然と過ごし、しばらくして「祖父のところまでテレビを見てみると、バラエティ番組に有名な作家が登場して、「あの世」について話しはじめた」のをきっかけに、サクと祖父は死後の世界について話し合う。それは本文で八頁にもわたり、アキのいない世界でどう生きるかについて、サクが多くを学ぶ重要な場面である。サクは次のように考えている。

「大切な人がたくさん死んだから、人間はあの世や天国を發明したんだ。(中略)生き残ったものは、死んだ人たちを、そういう観念によって救おうとしたんだ。」

かつてアキが「あの世って、この世の都合で作られされたもの」だと語ったことをなぞったのであり、祖父も「あの世や天国」を実体として設定することには懐疑的であろうだ。しかし二人は対話を続け、祖父は「形を離れて考えれば、わしらはずっと一緒だった。」と語り、「それはおじいちゃんの思い込みじゃないの」と反論され、「人間が頭を使って考えることで、思い込みでないことなど」はなく、ただ「自分の思い込みを保証するものとして」「愛」を使うのだ、と考えを進め、次のようにまとめる。

「死んだ人にたいして、わしらは悪い感情を抱くことができない。(中略)大切な人の死はそんなふうに、わしらを善良な人間にしてくれるのだろう。それは死が生から厳しく切り離され

て、生の側からの働きかけを一切受けないからではないだろうかね。」

「おまえはいま彼女のために苦しんでいる。彼女は死んで、もはや自分で自分の境遇を悲しむことさえできない。(中略) 言ってみれば、彼女の身代わりに悲しんでいるわけだ。そうやって朔太郎は、彼女を生きはじめているんじゃないのかい」

祖父は「やっぱり理屈って気がする」と言われ、「それでいいんだよ」「考えるってのは、本来そういうことだ。」と答え、「オーストラリアへ行っておいで」と励ます。救いの場を実体化して安心するのではなく、死と生の断絶を越えて死者と生きるために、愛と思索が必要なことを説いたのであろう。

この場面での愛と死をめぐる思索は決して体系的なものではない。しかし、重要だと思われるのは、祖父がサクの思索を、対話しながら導いていることだ。祖父は要所所で自説を披瀝するが、対話の途中で「なぜだと思う」「とは言えないかな」「ということを考えてごらん」「それは形の問題かい?」「美しさの正体は何だと思う」などと、サクの考えるべき論点を提示したり、考えるヒントを暗示したり、愛と死の観念に懐疑的だったサクを「なんだか慰められてみたい気がする」地点まで導いたのである。

じつは、この作品の最初の表題は「恋するソクラテス」だった。

それを編集者が「話がストリートなお話なんで、もっとストリートなタイトルにしたいなと思って」現行の表題に変更したのだった。

ソクラテスは古代ギリシャの哲学者であるが、善や正義や勇敢やについて「それは何か」と問いかけ、相手の思い込みを正し、より良い知識へと導くことを繰り返した。その弁証法的対話術を自ら「産婆術」になぞらえていたが、相手に「無知の自覚」を強いることにもなり、死刑の判決を受けたが諾として従った。著作は遺さず、弟子のプラトンが『ソクラテスの弁明』などにその活動を記録した。この場面で祖父はサクと対話しながら、愛の思索に「産婆術」を施したことになる。単数形なので、愛と死の思索を模索するサクの物語と考えることも出来そうだが、「産婆術」に注目すれば、「恋するソクラテス」とはむしろ祖父が主人公で、かつての恋を想起しながら後続者の愛と死の思索を誘導する物語になる。どちらにも判断できることが、この表題に落着しなかった原因かもしれない。

四、愛と死の哲学

ところで、この愛と死の思索は、祖父が「わしの口から発せられる愛は、世間一般で言われている愛とは、似て非なるものだからな」と言うように、中学校の校庭で獲得した緩やかな思想と比べて、よ

り哲学的である。作者によれば、「エマニュエル・レヴィナスやシ
モーヌ・ヴェイユを使いましたが、直接的にはなく、たとえば祖
父の台詞に紛れ込ませるとか、それなりに工夫はして」いたらしい。
レヴィナス（〇六一九五）は『存在するとは別の仕方、あるいは
存在することの彼方へ』（七四）などで知られ、ヴェイユ（〇九一
四三）は死を前に書き継いだ断想集が『重力と恩寵』（四七）に編
集されて反響を呼んだ。ヴェイユからは真空状態にまで全てを剥ぎ
取られて神の恩寵を待つ姿勢を学んだかもしれないし、レヴィナス
からも次のように多くを学んだようだ。

レヴィナスは右の主著で、存在を既定の前提とせず、「存在とは
他なるものへと過ぎ越すこと——存在するとは別の仕方で。」（合田
正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫）という発想から思索を展
開する。全体の梗概である第一章を参照すれば、存在が有意意味な
「内存在〔利害〕」であるためには「努力・傾動」つまり「他なるも
のへと過ぎ越すこと」が必要であり、自我も主体的であるためには、
それを他人の場所に〈人質〉のように〈身代わり〉のように置く必
要があるという。それ故、「主体性は知らぬ間に〈善〉の光線を浴
びてしまう。」とされる。「前置き」で本書の「枢軸」とされた「第
四章 身代わり」でも、「〈自我〉は最初の贖い」であり、「〈自己〉
とは善良さである」とされる。自我も過ぎ越した途端に差異を生じ

他者性を帯びる。ここでの他者や他人は一般的な他人ではないこと
に留意しなければならない。祖父が暗示したようにサクがアキの
〈身代わり〉に生きるとは、哲学的な意味での自我とその場所を、
登場人物に分担させたことになるが、「善良な人間」として生きる
ことがアキの遺志に合うことだと解釈できるだろう。〈身代わり〉
も「過ぎ越すこと」も「善良さ」も「愛」の類語である。

ただ、〈身代わり〉に生きるためには、死者を自分の悲嘆で束縛
しないことが要請され、それ故、忘却にも近づいてしまいうだろう。
『謎解き『世界の中心で、愛をさけぶ』』では、レヴィナスの「たっ
たいま死んだ者が残した空位も、その座を占めようとする志願者た
ちの眩きによって埋められてしまうのだ。」（第一章）という一節が、
作品末尾の「朔太郎の心の中でアキが占めていた場所を、新しい彼
女が埋めていくこととなります。恐ろしいのは、アキの不在ではな
く、アキを忘れ、日常の雑事で心が埋められて行くことです。」と
いった事情に影響したことを想定している。その一節は、存在とい
う概念を否定した途端に起きる哲学的な事態を喩えたものであった
が、作者の印象に残ったと思われ、「祖父の台詞に紛れ込ませる」
範囲を越えて、描かれなかった「十数年」の「魂の彷徨」を説明す
るのに相応しいかもしれない。

たしかに、サクが連れてきた「彼女」の姿が実像を伴って描かれ

ない限り、「アキを忘れ、日常の雑事で心が埋められて行く」恐怖の克服は明確ではない。しかし、祖父の墓参をし、たとえ抒情的にでもアキの遺灰を撒いたことは意義深い。遺灰を撒く直前に、「彼女の姿はグラウンドの遊具とともに闇に紛れてしまいそうだ。いつかここからアキを見ていた。夕暮れの光のなか、校庭の隅の登り棒をよじ登っていく彼女を……」と、「彼女」とアキは溶融して描かれた。〈身代わり〉という個別の愛が、新しい恋人を包含しうる普遍の愛へと緩やかに成熟していたのであろう。

また、アキの死後の世界とは、内存在を拒絶するような「記憶することも再現することもできない不可視の過去、現在を必要としない大過去」に相当するだろう。それに対して、「現在——、それは始まりと終わりを有した存在することであり、この始まりと終わりは、主題可能な連繫をなすものとして集約されている。」(第一章)が措定されているが、この「現在」とは、先に「両端(の内側)」と補った、「この世界には、はじまりと終わりがある。その両端にアキがいる。」という思いに重なる。アキは内存在として「主題可能な連繫をなすもの」であり、「世界の中心」だったのであろう。

レヴィナスの影響をめぐって難解な遠回りをしたかものかもしれない。しかし、サクもこのように難解な遠回りを彷徨してしか、深い悲嘆を癒せなかったのだ。それほどに二人の純愛は深かったのであり、

二人の純愛とサクの成長を同じ深さで鑑賞しなければならない。ここに、この作品の批判精神を読むこともできる。また、この作品がレヴィナスの哲学的な論理を、登場人物の関係に強引に置き換えたかのように判断してはならない。優れた哲学を小説に受肉させたいと作者は願ったのであり、そこにこそ、文学的な飛躍の実例を見ることができるのである。レヴィナスもヴェイユもフランスのユダヤ系の哲学者で、第二次世界大戦中は過酷な思索を強いられた。レヴィナスは捕虜としてドイツに抑留され、ヴェイユは占領下の故国に潜入しようとして適えられず、食事を拒否してサナトリウムで死んだ。それを背景とした、二人の倫理的でさえある哲学が、この作品の文学的飛躍を誘ったのかもしれない。

いずれにしても、祖父の物語がこうした愛と死の哲学を媒介しながら、サクとアキの個別の愛の物語を、時代や状況を越えた普遍の愛を主題とする純愛小説へと止揚したのである。付言すれば、サクと祖父とは少年と老人であり、昔話やファンタジーでは世界を更新する智慧は幼少年・老人・不具者・魔女からもたらされるのが通例で、この作品も遺骨をめぐる非日常的なファンタジーにとどまったと考えることもできる。なにしろ、近代小説で主人公が成長するために通例となる父親(などの対立的他者)との葛藤が全く描かれていないのだから。しかし、純愛に葛藤を持ちこむことは避け、代り

に親近的他者としての祖父の物語を媒介させることで、作品の構造を豊かにしたことは確かである。

五、メディアの中で

冒頭でふれたように、「世界の中心で、愛をさけぶ」は多くの読者を獲得し、メディアの中で次々に再演（あるいは変奏というべきか）された。インターネット上のフリー百科事典『ウィキペディア』(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)を参照すれば、少女コミック（二〇〇四・五／作画、一井かずみ／小学館）に、ラジオドラマ（〇四・五／脚本、飯村聖美／TOKYO FM）に、映画（〇四・五／監督・脚本、行定勲／東宝）に、テレビドラマ（〇四・七／九／脚本、森下佳子／TBS）に、舞台（〇五・八／九／脚本、蓬菜竜太）に作品化された。それらは原作が抱える破綻や可能性をどのように埋め合わせ発展させ、再演したのであろうか。

それを考察する前に、この作品自体がその起源とも呼べそうな作品をどう再演したのかを考察したい。すでに知られていることではあるが、「世界の中心で、愛をさけぶ」という表題は、編集者からの提案があったとはいえ、庵野秀明監督脚本のアニメ・ドラマ『新世紀エヴァンゲリオン』（九五・一〇〜九六・三、全二七話）の最

終話「世界の中心でアイを叫んだけもの」に由来し、それはまたハラン・エリスンの「世界の中心で愛を叫んだけもの」(The Beast that shouted Love at The Heart of The World 六九／邦訳ハヤカワ文庫、七九)に由来している。

エリスンの「愛を叫んだ」は、ある男の大量無差別殺人事件から始まり、裁判で「おれは世界中のみんなを愛してる。ほんとうだ、神に誓ってもいい。」と叫ぶ。彼は、「物質化された心霊が微妙な諧調の秩序の中で歌う」「究極の中心」「交叉時点(クロスホエン)」を通じて「一万年が二度経過するあいだ」に「数瞬、数年、あるいは数千年」、「排出」された狂気を受肉したのであった。末尾では、「まだ生まれてはいない時間系」の惑星に置かれた狂気の記念碑を見れば、「天国の中には、そこからすべての狂気の流れ出す中心があること」を知るだろう、とされる。世界に絶えない悪を狂気の排出と受肉に置き換え、世界に対する苛烈な愛憎を描いている。困難なSF的思索に支えられた緊密な短編である。

庵野の『新世紀エヴァンゲリオン』は、二〇一五年を舞台に、人類に迫る謎の敵「使徒」と戦うために人造人間エヴァンゲリオンに乗り込む一四才の少年少女たちの姿を描いた。国際的特務機関ネルフの「人類補完計画」とは何か、戦いの行方はどうなるのか、不明のまま中断され、二本の映画版（九七・三、九七・七）でも解決さ

れず、今夏から映画版で四篇の完結編が予定されているという。最終話「アイを叫んだ」は、少年少女の心と同調することで起動するエヴァに乗り戦う、碇シンジの「何故エヴァに乗るのか？」という疑問を追及している。少年少女は失敗すること、人から嫌われること、弱い自分を見ることを、みんな同じに怖れ、その欠けている心をお互いに埋めあおうとしている」のが「補完計画」だとして、様々な声と自問が響きあい、「僕はここにもいいんだ」と決意して閉じられる。人類と「使徒」との戦いの劇的対立は、少年少女の「自分探し」の物語に解消されてしまった。「アイを叫んだ」の「アイ」は「I」つまり「自分」を意味している。

原作の作者は、「愛を叫んだ」と「アイを叫んだ」の世界まで暗示しようとしたのではなかっただろう。しかし、「世界」「中心」「愛」という抽象度の高い言葉を借用し「けもの」という生々しい言葉を削除したことで、作品中に散見（二八例）する「世界」という言葉と呼応しながら、祖父の恋愛を参照するサクとアキの姿や、祖父の産婆術を経由して成長するサクの姿に注目するより、サクとアキの純愛物語だけを切り出して鑑賞するよう、読者を導くことになったのである。末尾でサクが新しい恋人を連れて登場することに、読者の反感は案外に根強い。そして、この作品をサクとアキだけの純愛小説として鑑賞する傾向は、映画やテレビドラマにも引き継が

れたのである。

少女コミックでは、「世界の中心」を特定していないが、サクはアキの臨終らしい場面で「力の限りさげんだのに声にできなかった」とされる。末尾の中学校再訪の場面では、新しい恋人にアキのことは知らせてあった。オーストラリアで「アキの灰を撒けなかった」と明記し、新しい恋人と末尾で撒く。原作の純愛物語の矛盾点をかなり整理し、コマ割りを細分して約一八〇頁に収め、読みやすい。しかし、サクと祖父の交流については、盗骨の場面は描かれたが、祖父の産婆術の場面は早速削除されている。

映画では、サクの婚約者リッコが、偶然にも、かつて自分がアキの声を録音したカセットテープを届けていた相手がサクだったこと、交通事故に遭い最後のテープを届けられなかったことに気づくところから始まる。そのテープには「私の灰をウルルの風に撒いてほしいの。そしてあなたはあなたの今を生きて。」とあった。サクとリッコはオーストラリアの赤い砂地で灰を撒く。撒く直前にサクは「ここに来て、世界の中心がどこにあるか分かった気がする。」とつぶやく。過去と現在を往復しながら進行し、サクの祖父は登場せず、街の写真館主シゲ爺がかつての恋人、ハルコ校長先生の遺骨をサクとアキに盗んでもらう。二人はシゲ爺に結婚写真を撮ってもらい、現在も写真館主であるが、サクに産婆術を施しはしない。

テレビドラマでは、三四才のサクがオーストラリアへの修学旅行の夢から覚めるところから始まり、一二話にわたる毎回、現在と過去を往復する。回想の中で担任教師や同級生たちとの交流も描かれるが、二人の純愛の進行は原作をなぞっている。アキの遺言で「ウルルの空」に散骨しようとしたが、アキの名前を絶叫して撒けなかった。サクの祖父は写真館を営み、サクにかつての恋人の骨を盗み一緒に散骨してほしいと依頼したが、実行の翌日に突然亡くなる。現在においてサクは大学時代からの親友でシングルマザーとなっていた明希との愛を育てて行く。

ラジオドラマと舞台は未見であるが、少女コミックと映画とテレビドラマでは共通して、サクとアキの純愛物語は強化される一方、サクと祖父の交流は縮小され、祖父の産婆術は削除されている。祖父の産婆術のような場面こそ、遠回りや時に難解で主たる物語からは不純に見えても、作品自身に批判精神を内蔵する意味で、文学あるいは言語芸術にこそ可能であり必要な機能なのかもしれない。物語が重層的あるいは複層的に媒介しあうことで、作品の主題は豊かになる。物語を単層化することで、作品はロマンチックに純化されるが、多くの場合、予定調和的な万人好みの決着をなぞることになる。『世界の中心で、愛をさけぶ』の再演でも様々に変奏されながら、大きな枠組ではそうした事情が進行しているようだ。

ちなみに、原作に大きな影響を与えた、村上春樹『ノルウエーの森』（八七）と比較しておきたい。主人公ワタナベは、高校時代に自殺した親友キズキの恋人直子と再会し深く愛する。直子は精神に病を抱え、山奥の療養所に入院する。直子をどう助けようか苦しみながら、大学の同級生で健康でいて鋭敏な緑も愛し始める。直子は自殺し、主人公は一ヶ月放浪した後、緑に「君とどうしても話したいんだ。」と電話をかけ、場所を問われて「僕は今どこにいるのだ？」と取り乱す。作品は「僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。」と閉じられる。末尾の「場所のまん中」と「世界の中心」は似ているし、作品の冒頭が十数年後の飛行場であること、「蛍」（八三）という直子との物語を描いた短編から発展しているが、夢島の蛍の描写を連想させること、音楽や料理の蘊蓄やコアな性描写などにおいて、すでに影響は指摘されている。しかし注目したいのは、直子との物語と緑との物語は、三人とも二十歳の恋愛を描いて親近しているはずなのに、直子の死の悲嘆はあまりにも深く新たな恋愛に学びようがないことである。レイコという年上の女性がサクの祖父の役割を担うが、産婆術も機能しない。逆に、二つの物語が学びようもなく他者でありうることを通じて、主題の深刻さを表現している。『世界の中心で、愛をさけぶ』では重層的な二つの物語が単層化されつつあるが、『ノルウエーの森』で二つ

の物語は最後まで複層的であった。

また、原作にはなかったいくつかの設定が、映画からテレビドラマに引き継がれている。アキが陸上部員だという設定、シゲ爺とテレビドラマの祖父が写真館を経営していること、映画では「ウルルの風」に、テレビドラマでも「ウルルの空」に散骨すること。「ウルル」とは、オーストラリア大陸のほぼ中央にある、地面から三三五米の比高と九・四千米の周囲を持つ単一の岩で、一般にエアーズロックと呼ばれ、アボリジニの聖地として知られている。原作ではアキの両親が観光として登り、散骨は赤い砂地の中の聖地で行われた。映画でもテレビドラマでも赤い砂地で散骨されているが、「ウルル」というアボリジニの呼称を持ち出し、突出した頂上での鎮魂であるかのように演出している。純愛路線の強化が進行していると見てよいだろう。

ふりかえれば原作がブレイクした二〇〇三年とは、純愛小説にとって記念すべき年だった。九七年からインターネットで小説を発表していた市川拓司が『いま、会いにゆきます』（小学館、〇三・二）を発表後、映画『恋愛寫真』（〇三・六）のコラボレーション企画として『恋愛寫真 もうひとつの物語』（小学館、〇三・五）を書き下ろし、それが映画『ただ、君を愛してる』（〇六・一〇）化され、『いま、会いにゆきます』も映画化（〇四・一〇）、テレビドラ

マ化（〇五・七）され、いずれもヒットした。市川と片山のメディアミックスな活躍が、純愛小説の爆発的ブームを生んだのであった。

「世界の中心で、愛をさけぶ」に戻れば、映画の脚本をリッコの視点から描いた益子昌一『指先の花 映画『世界の中心で、愛をさけぶ』律子の物語』（小学館文庫、〇四・五）が刊行され、平井堅が歌った映画の主題歌「瞳を閉じて」がヒットし、テレビドラマのロケ地には恋人たちが訪れ、「セカチュー」現象と呼ばれた。インターネットのそれぞれのファンサイトへの投稿もさかんである。最近文庫化（小学館文庫、〇六・八）もされたが、「セカチュー」現象は原作の手を離れて、メディアの中でさらに増殖している。

本稿は、二〇〇六年一月に本学教育学部の国文学概論Ⅱと国文学特殊講義Ⅱで講述した内容に基づいたものである。